

重唇音の軽唇音化について(1)

—趙元任(1941)の仮説—

吉池孝一・中村雅之

1. はじめに

中村：前回まで8回に渡って重紐について議論し、議論の最後に“音韻観の違い”についての話がありました。われわれの音韻観を手短に言えば「反切や分韻に反映するのは音声ではなく話し手の音韻観念である」というものです。

吉池：別の言い方をすると、話し手と聞き手の中にある（と仮定できる）音を聞き分け話し分ける習慣の総体が、反切の選択や分韻に反映するということですね。この点について考え方が異なる場合、別の言い方をすれば音韻観が異なる場合、議論はかみ合わないこととなります。

中村：議論はかみ合わないかもしれませんが、反切や分韻の有り様という客観的な事実があり少なくともそれを確認し得るのですから、まずはそれで良しとしましょう。反切や分韻などの事実をどの様に見るか、そこに音韻観の相違が現れるわけですが、その音韻観の相違についても明らかにする作業を積み重ねるということでしょう。

今回から中国語音韻史の重要な課題の一つである重唇音（両唇閉鎖音）の軽唇音（唇歯音）化の問題について議論しましょう。つまり、 $p > f$ の変化についてです。

吉池：この問題、中村さんは従前より気にしていましたね。

中村：重唇音の一部が軽唇音化するには何らかの条件があるはずですが。現在知られているところでは、拗音韻母が後続するものの内、前舌主母音が想定される音節では軽唇音化は起こらず、中舌・奥舌主母音が想定される音節で軽唇音化が起こる。つまり、主母音の違いが条件となっている。しかし、なぜ中舌・奥舌主母音においてのみ軽唇音化が起こるのか、少し納得がいかないのです。

吉池：なるほど。中国語の周辺の言語にも両唇閉鎖音（重唇音）の音変化はみられますが、中国語とはだいぶ様相を異にします。たとえば、金代女真語と明代女真語ですが¹、その概略を見ると次のとおりです。金代女真語b（両唇有声破裂音）→明代女真語b、金代女真語p（両

¹ 孫伯君(2016)『金代女真語』中国社会科学出版社、道爾吉・和希格(1983)『女真譯語研究』内蒙古大学学报増刊の両書を参照。

唇無声破裂音)→明代女真語 f(唇齒音)。なお満洲語文語の f は、金代女真語 p・明代女真語 f に遡るのですが、母音-i, o, u, ū とのみ結びつくので、女真語とのような関係を想定するか難しいところです。いずれにしても、女真語にあつては b と p の一方である p が全面的に f となったということです。満洲語文語では b, p, f が共存します。あるいは各種の方言や漢語語彙表記の混合ということかもしれません。

中村：いわゆるアルタイ諸語に類似の現象が多く見られるほか、日本語においても、語頭のハ行音は p>ɸ>h の変化をたどっています。一方で、朝鮮語のように両唇閉鎖音のみがあつて、唇齒音化を経験していない言語もあります。中国語のように両唇音の一部分だけが唇齒音化するの、かなり特殊です。

吉池：周辺言語においては、両唇閉鎖音は一斉に変化するか、もしくは全く変化しないかのどちらかであるが、中国語では両唇閉鎖音の一部分のみが変化する。中村さんはその音変化の条件を、主母音の違いに求めてよいものかどうか確認したいということですね。

中村：軽唇音化が、いつ起こったか、どこで起こったかということについても、可能ならば確認をしたいものです。

吉池：どのように議論をすすめましょうか。

中村：まずは関係する基本的な論文を読みましょう。軽唇音化の条件を主母音に求めた最初の論文である Yuenren Chao 趙元任(1941)²から始めるというのはいかががでしょう。以下、趙元任(1941)と呼びます。

2. 趙元任(1941)を読む

吉池：趙元任(1941)に目を通したのですが、わたしの力不足のためか、上手く意を汲み取れない部分があります。

中村：それほど特殊な言い回しはないと思いますが、文が数珠つなぎになることが多く、ピリオドまでがやや長いですね。

吉池：このような英文、橋本萬太郎氏の英文と通ずるところがあります。師匠と弟子は文章も似てくるものなのでしょう。

² Yuenren Chao 趙元任(1941) Distinction within Ancient Chinese. *Harvard Journal of Asiatic Studies* Vol. 5-3/4, pp. 203-233. 雑誌の年度は 1940 年、刊行は 1941 年。

中村：気になった箇所を互いに挙げて議論を進めてみましょう。

吉池：重唇音の軽唇音化の条件について、次の引用のように、カールグレン氏の説をあげ、その説には賛成できないとします。カ氏は三等韻であること及び合口であることを条件に軽唇音化するとしますが、唇音が開口であるか合口であるか決定することはできないとし、カ氏の説にはしたがいません。

KARLGREN lays down as the condition for dentilabialization that the word must be in division III and must be *ho k'ou*. There are a number of exceptions which he explains away in detail. Of the ten finals before which bilabials become dentilabials, one is *k'ai k'ou* 尤 *iəu*, which according to KARLGREN, is as good as *ho k'ou*, as the *u* is the principal vowel. Four are *ho k'ou* for all initials: 虞 *iu*, 文 *iwən*, division III under 東 *jung*, and 鍾 *iwong*. In the remaining five, *iwəi*, *iwěi*, *iwem*, *iwən*, and *iwang*, there are contrasts of *k'ai* and *ho* for non-labials, but none for labials. In the preceding section we could not decide whether to regard labials as *k'ai k'ou* or *ho k'ou* and so had to take subsequent change into dentilabials, based presumably on earlier or primary *ho k'ou*, as our criterion. (p. 223)

中村：三等韻であること及び合口であることは、軽唇音化の音声的説明としては不十分であるとします。一方、三等韻の介音 *i* (high *i*) の後に中舌母音又は奥舌母音が続く場合、通常は顎を引っ込めた位置で発音され、下唇が上の歯に触れる傾向があり、その結果、唇歯音が生じるとの仮説を提示し、例字も提示します。

The statement that bilabials become dentilabialized when they are *ho k'ou* in division III, that is, when they are rounded and palatalized, is reasonably plausible but hardly enough to be a phonetic explanation. Besides, it still remains to determine when a labial is rounded and if so whether "primarily". On the other hand, suppose we assume that, if a labial word has a high *i* and is further followed by a central (mixed) or a back vowel, which is usually associated with a retracted position of the jaw, then there will be a tendency for the lower lip to touch the upper teeth, thus resulting in dentilabials. How does this supposition square with the facts? Of the ten finals in which dentilabials occur, nine have central or back vowels, namely,

夫 <i>iu</i>	廢 <i>iwəi</i>	否 <i>iəu</i>
凡 <i>iwən</i>	反 <i>iwən</i>	分 <i>iwən</i>

吉池：軽唇音化と主母音を結び付けるアイデアは興味深いですね。上に挙げた唇歯音が生じた実例はカールグレン氏の推定音に依ったものです。これを見るとたしかに軽唇音化した音節の主母音は中舌もしくは後舌となっています。方 *iwang* については注記に「39 We are taking *a* as a central vowel, as against *á*, a very back vowel.」(p. 224) とあります。つまり、本来は前舌とされる母音「*a*」を趙元任は敢えて中舌と見なすということです。これらによって軽唇音化と中舌・後舌の主母音を結び付けたわけです。もっともそのアイデアの根底には、趙元任(1928)『現代呉語的研究』³の調査を通して、生きた方言に接したことにあるのではないかと私は考えています。

中村：どういうことでしょうか。

吉池： $p > f$ の変化ではなく $h > f$ の変化について趙元任(1928) にあります。同書の(第一表 3)を見ると、旧曉母は韻母の異なりを条件として摩擦音となる場合と唇歯音となる場合があります。

開口の場合、33 地点の何れにおいても摩擦音の[h]もしくは[x]です。問題は合口の場合です。寶山霜草墩は合口韻母を条件として全て[f]となります。上海では「虎」など“u 韻”の場合[f]となり、「灰」など“u 韻”以外の場合[x^(u)], [f]_{少数}となります。餘姚と鄞縣は“u 韻”の場合[f]となり、“u 韻”以外の場合[x^(u)]となります。

有声子音の旧匣母も韻母によって摩擦音となる場合と唇歯音となる場合があります。開口の場合いずれの地点でも主に摩擦音の[h]です。合口の場合韻母によってさまざまですが、浦東では「胡」など“u 韻”は有声唇歯摩擦音[v]となり、「回」など“u 韻”以外は[h(u)][v]となります。餘姚と鄞縣は“u 韻”の場合[v]となり、“u 韻”以外の場合[h(u)]となります。

中村：後続する韻母の如何によって唇歯音となる場合とならない場合があるということですね。

吉池： $h > f$ となる現象は、わたしにとって印象深いものでした。このような調査が下敷きに在り、それと共に軽唇音化した音節の実例(カールグレン氏の推定音に依るもの)により、軽唇音化と主母音を結び付けるアイデアに繋がったと想像しています。なお、このように $h > f$ となる現象は、許寶華(1988)でも次の引用のように一般的な変化として報告されています。

³ 趙元任(1928)『現代呉語的研究』清華學校研究院、1928 年。大華印書館 1968 年による。

「(4) 在[u]韻前不分[*fu*][*hu*]和 [*vu*] [*fu*], 都讀[*fu*][*vu*], 其他合口韻前分[*f*][*h(u)*]和 [*v*] [*h(u)*]. 例如: 夫=呼 *fu* 附=戸 *vu* 分 *fən*≠昏 *huən* 坎 *vən*≠魂 *fuən* . . .【省略】. . . 第四種讀法老年中年少年中都有, 在青少年中占優勢」(51 頁)

中村: これらの例は我々のテーマである軽唇音化 ($p > f$) の問題に直結するものではありませんが、一つのアイデアのもとにはさまざまな下敷きがある (かもしれない) ということですね。

吉池: やや遠回りをしました。趙元任(1941)にもどりましょう。中舌母音又は後舌母音が続く場合、顎を引っ込めた位置で発音されるため、下唇が上の歯に触れる傾向があるとの音声的な説明がありますが、これに就いてはいかがでしょう。

中村: 平山久雄(2022)⁴に次の記述があります。

「軽唇音化の音声的理由は、Chao (趙元任) 1940 *Distinction within Ancient Chinese* に述べられているように、中舌・後舌母音を発音する際に下顎が後退する結果として下唇と上前歯との接触が生ずることにあると考える。この考え方について尾崎雄二郎 1970:1980 「漢語史における梵語學」97 頁は「下顎は、實は解剖學的に、正常の咬合位置から、恐らく一ミリ程も後退できない構造であることによって、成り立たない」と批判しているが、問題は舌と下唇の前後位置が連動しやすいことであって、下顎骨の解剖学的性質を論点とするのは見当が違ふと言うべきであろう。」(162 頁)

吉池: 尾崎氏の「正常の咬合位置」が何を指すか明瞭ではなく、解剖学的構造は人によって異なるかも知れないけれど、私自身について言えば、口を半開きにしたとき、下顎は比較的自由に前後に動きます。[*pɔ*]と[*fɔ*]と発音したとき、[*fɔ*]の方は下顎がやや後ろに引かれます。そのような点から見れば、趙氏の指摘には合点がいきます。中村さん、いかがでしょう。

中村: 理屈としては分かります。しかし、例えば *ɛ* か *ə* かの微妙な違いで軽唇音化するかどうかが変わってくるというのは、やや腑に落ちない部分があります。しかし、中舌・後舌母音が軽唇音化にどのように関わるか、または関わらないか、そのあたりの検討は措くとしても、重紐を有する韻と軽唇音化する韻は所謂“補い合う分布”をしています。現在の目から見ると、軽唇音化するC類音節の主母音が中舌・後舌母音であり、他方の重紐のA・B類の主母音は前舌とされます。そのような認識が形成されるのが、趙元任(1941)からということになるのでしょう。

⁴ 平山久雄(2022)『中古音講義』汲古書院、2022年。

次に、平山久雄(1967)⁵を読みましょう。

3. 平山久雄(1967)を読む—主母音について—

吉池：平山久雄(1967)は、軽唇音化を論ずる先行文献として Karlgren(1915-1926)⁶、趙元任(1941)、三根谷徹(1953)(1956)⁷をまとめ、次いで「私見による説明」として議論を進めます。先行文献のまとめの箇所ですが、わたしにとっては理解の良き参考となるものです。そこで、やや重複しますが平山氏のまとめによって先行文献の確認をして、その後に平山氏の考えを確認したいのですがいかがでしょう。

中村：異存はありません。音声学的要因についての議論では三根谷徹(1949)⁸も紹介しているので、これにも触れることにしましょう。

Karlgren(1915-1926)

中村：それでは Karlgren(1915-1926)からいきましょうか。平山氏はカ氏をまとめて、軽唇音化した「東屋(三等)、鍾燭、微、廢、文物、元月、陽葉、尤、凡乏」の諸韻を挙げ、軽唇音化しない「支、脂、祭、真質、仙薛、宵、庚陌(三等)、清昔、蒸職、幽、侵緝、鹽葉」を挙げます。カ氏が軽唇音化の条件として、a) 声母が j 化している(平山氏は韻母が拗音であると言い換えることができるとする)、b) 声母の後に u (w) が続く、以上の二点をあげるのに対して、「唇音に続く場合の韻母が事実には開・合いずれの音韻的系列に属するものであるかを、個々の韻について、反切下字の系聯から実証することも困難である。したがって、条件 b) を成り立たせるために、声母に軽唇音化を生じた場合の韻母を合口と推定し、それによって軽唇音化の生起を説明するという循環論に陥ることになってしまう。」(6頁)とし、「Karlgren氏によれば合口でありながら軽唇音化を起さなかった例として庚陌韻、支韻、脂韻があり、開口でありながら軽唇音化を起した例として凡乏韻、尤韻がある。Karlgren氏はこれら例外に対して説明を試みているけれども、十分成功したものとは認めがたい。」(6頁)とし、Karlgren説が成り立たないことを示します。

⁵ 平山久雄(1967)「唐代音韻史に於ける軽唇音化の問題」『北海道大學文學部紀要』15-2、3(240)-59(184)頁。

⁶ Karlgren(1915-1926)“Etudes sur la phonologie chinoise” Stockholm.

⁷ 三根谷徹(1953)「韻鏡の三・四等について」『言語研究』22/23、pp. 56-74。三根谷徹(1956)「中古漢語の韻母の体系」『言語研究』31、pp. 8-21。

⁸ 三根谷徹(1949)「軽唇音化の問題」『中国語學』27、1949年、2-3頁。『中古漢語と越南漢字音』汲古書院、1993年、63-65頁所収。なお、三根谷徹(1949)には「jǐu」と修正したとあるが、三根谷徹(1993)に掲載されたものは「jǐu」と誤写するので注意が必要。

吉池：遠藤光暁・秋谷裕幸(2022)⁹によると、重紐韻は、A類とB類の両者が有る「支、脂、祭、真質、仙薛、宵、侵緝、鹽葉」と、いずれか一方がA類もしくはB類として有る「庚陌（三等）、清昔、蒸職、幽」とから成るので、現在の目から見ると、上に挙げた軽唇音化しない「支、脂、祭、真質、仙薛、宵、庚陌（三等）、清昔、蒸職、幽、侵緝、鹽葉」は全て重紐韻であり、軽唇音化した「東屋（三等）、鍾燭、微、廢、文物、元月、陽藥、尤、凡乏」と補い合う分布を示します。

中村：その点をおさえておくで軽唇音化をめぐるこれからの議論が理解し易くなりますね。それでは次に、先の第2節「趙元任(1941)を読む」と重複する部分がありますが、平山氏のまとめになる趙元任(1941)を確認しましょう。

趙元任(1941)

吉池：「介音として high *i* をもつ拗音がある上に、中舌あるいは奥舌の主母音を韻母が含む場合に於て、軽唇音 (dentilabials) が生じたとされるのである。」と趙氏の仮説をまとめます。{重唇音+介音 high *i* +中舌・奥舌主母音→軽唇音}ということですが、この「high *i*」については説明が必要ですね。

中村：「high *i*」は、「The beginning of all type III finals has a high or close *i*, the beginning of all type IV finals has a low or open *i*。」(趙氏 p.213) の「high or close *i*」に相当するものです。カ氏は反切上字の使用状況によって I・II・IV等の声母は“Pure”であり、III等の声母は“Yodized”(j化=口蓋化)していたとしましたが、趙氏は、反切上字と下字の“medial harmony”(介音の調和)の結果であるとし、IV等の介音は“low or open *i*”であり、III等の介音は“high or close *i*”としました。趙氏の言うIV等は我々の言う直音4等の事なので、現在では修正が必要ということになります。今はこのままとしておきましょう。

吉池：趙氏は自身の、主母音に就いての仮説を通すために、主母音に関してカ氏の音価の訂正をしますね。

中村：軽唇音化が生じた音節の主母音が中舌・奥舌であるならば、それ以外の軽唇音化が生じない音節の主母音は前舌ということになります。そこで、軽唇音化が生じた微韻 *ǰei* を中舌主母音の *ǰai* に修正し、軽唇音化の生じなかった幽韻 *iəu* を前舌主母音の *ǰəu* と修正しました。この修正について平山氏は「音韻史の上でそれを支持する材料があり、妥当であると認められる。」(7頁)とします。しかし、「軽唇音化の生じなかった侵韻 *ǰəm* を *ǰem* に、蒸韻

⁹ 遠藤光暁・秋谷裕幸(2022)「重紐」『中国語学辞典』日本中国語学会編、262頁。

jəng を jɛng に各々改めるについては、積極的な支持を他に見出しえないのが難点である。更に軽唇音化を起さなかった庚韻（三等）jəng の音価を改めることは一層困難である。」（7-8 頁）とします。「このようなわけで、軽唇音化の条件に関する上引の仮説が完全には通らないことを趙氏は承認する。それにも拘らず上引の仮説を提出するのは、その内容が甚だ魅力的であり、他の学者がこの仮説の障害を打開することを望むからである、と趙氏は述べている。」（8 頁）とし、平山氏は、それを受けて趙氏の仮説を認める方向で、主母音については「韻母体系よりみた説明」として三根谷徹(1953) (1956)によって趙氏の議論を補足します。

三根谷徹(1953) (1956)

吉池：三根谷徹(1953)は、重紐A類とB類の違いを音韻論的解釈という観点から声母の口蓋化の有無の違いとした論文です。三根谷徹(1956)は、この解釈を前提として介音を/i/の一種類とし、藤堂明保(1954)¹⁰に手を加えて韻母の体系を提示したものです。いずれの文献も軽唇音化を直接論じたものではありません。三根谷徹(1956)は、軽唇音化が生じない音節の主母音を前舌と解釈するので、平山氏は三根谷氏の解釈を利用して趙氏の仮説の参考とします。

中村：軽唇音化が生じなかった庚韻（三等）jəng を/-iaŋ/とし、侵韻 jəm を jɛm とし、体系の上から前舌主母音であることを支持しました。同じく軽唇音化が生じなかった蒸韻/-iAŋ/については説明ができない例外として残されます。

吉池：このように、釣り合った体系を提示した音韻論的解釈により、軽唇音化した音節と軽唇音化しない音節の主母音を論じることはどうなのでしょう。

中村：三根谷徹（1956）は、提示した主母音の一つ一つについて根拠を明示しているわけではありません。体系的に見た場合に釣り合っているかどうか、理に適っているかどうかという観点から整理した主母音です。体系的な美しさが根拠になるかどうか、それこそ冒頭で触れた“音韻観”にかかわる問題ですが、私の考えでは参考にはなるけれども、それ以上のものではないということです。次に、平山久雄(1967)の平山氏自身の「私見による説明」を検討しましょう。

平山久雄(1967)の「私見による説明」

吉池：「私見による説明」は、趙元任(1941)と三根谷徹（1956）で残された問題を検討したものです。趙元任(1941)と三根谷徹（1956）は軽唇音化が起こらなかった蒸職韻の主母音を中

¹⁰ 藤堂明保(1954)「中国語の史的音韻論」『日本中国学会報』6。

舌・奥舌として残しました。説明の困難な例として残ったものです。

中村：平山氏は例外に見える蒸職韻について、次に挙げる所謂類相関の現象によって、蒸職韻の唇音声母および職韻の牙喉音合口の音節は重紐B類であり、蒸職韻の牙喉音開口の音節はC類であるとし、B類に/-ieŋ, iek/と/-iuek/を設定し主母音を前舌とし、C類については/-iʌŋ, -iʌk/を設定し主母音を中舌・奥舌系としました。同様に、反切上字の検討により、庚陌韻三等唇音、侵緝韻唇音もB類であり前舌主母音を設定し得るとし、「以上の所論に誤りなければ、軽唇音化の条件に関する趙元任氏の仮説は、実質上貫徹せしめられたこととなる。」(12頁)とします。

鼻 字		上 字
A	→	AorC
B	→	BorC
C	→	C

中村：軽唇音化の条件に関する議論とは直接の関係は無いことですが、吉池孝一・中村雅之(2024)¹¹において、蒸職韻の牙喉音開口をC類とする事については、C類ともB類とも見る事ができるとしたことを付け加えておきます。

いずれにしても、以上の議論は、軽唇音化は中舌・奥舌母音を条件として生じたという趙氏の仮説をめぐる主母音に焦点を当てた議論でした。次の議論は拗介音に焦点をあてたものです。

4. 軽唇音化の音声学的原因—拗介音について—

中村：平山氏は「3 軽唇音化の音声学的原因」において、軽唇音化が生じた音節の拗介音に焦点をあて、主母音との関係を論じます。軽唇音化が生じたC類音節の声母は口蓋化していたとするので、その議論も確認しましょう。平山氏は先ず三根谷徹(1949)を取り上げ拗介音の働きを議論します。

三根谷徹(1949)

吉池：三根谷氏は「有坂・河野両氏による説に従い、趙氏の所説を訂正したい。軽唇音化の起ったのは有坂・河野両氏の乙類の介音(中舌的な-ɿ-)をとる場合であることは明らかである。口蓋性のゆるい中舌的な-ɿ-のあとに中舌あるいは後舌の母音が来る場合に、その前の protruding な唇音が軽唇音化することは音声学的にも無理がないと思われる。だが、介音をこのように訂正しても、この場合、事情はさして好転しないようである。」とします。

¹¹ 吉池孝一・中村雅之(2024)「重紐をめぐる幾つかの問題(8) —類相関を利用した音価の推定について—」『KOTONOHA』261(2024. 8. 30)、PP. 1-18。

これによると「口蓋性のゆるい中舌的な介音-ɨ-」が軽唇音化の条件として役割を果たしていると考えているようです。

中村：趙氏は、3等韻の介音を“high or close *i*”とするので、それを有坂・河野説によって口蓋性のゆるい中舌的な介音-ɨ-に修正し、それと軽唇音化を結び付けたわけですね。

吉池：三根谷徹(1953) (1956)では音韻論的解釈と称して、今で言う重紐B類を非口蓋化声母、重紐A類を口蓋化声母とし、有坂・河野説の二種の介音を解消したのですが、三根谷徹(1949)はその前の段階の議論です。ところで、三根谷氏は、protruding な唇音の後に、口蓋性のゆるい中舌的な介音-ɨ-が後続し、軽唇音化したとするわけですが、三根谷氏自身はこの変化を音声学的にどのように考えていたのでしょうか。

中村：三根谷氏はほとんど何も説明してはおらず僅かな言葉から想像するしかないので、「protruding (突き出した)」という言葉が唇音の形容に使用するところから見ると、①前に突き出した状態の両唇閉鎖音が口蓋性のゆるい中舌的な介音によってやや緩み下顎が下がる、次いで、②中舌・奥舌主母音により下顎が後ろに引かれ唇歯音の *f, v* となったと理解できそうです。いかがでしょう。

吉池：平山氏は次のように説明します。「三根谷氏の軽唇音化の音声的な経過に対する考えは、次の如く理解してよいであろう。すなわち、-ɨ-に先行する唇音声母は口蓋化が緩かった故に（またそれに中舌・奥舌主母音の影響も加わって）protruding (つき出し円め的)に発音され、そのため、 $p > \phi > f$ の経過によって軽唇音化が発生したのである、と。」(14頁)とあります。三根谷氏の説明に対する中村さんの理解と、平山氏の理解とは異なるようですね。

中村：私は三根谷氏の説明を、前に突き出した状態の唇がゆるい介音と中舌・奥舌主母音の影響で後ろに引かれて軽唇音化すると解釈したのですが、平山氏は介音と主母音の影響で唇が突き出され、それによって軽唇音化するという解釈のようです。三根谷氏の意図する所がいずれであったかはともかくとして、ゆるい介音が軽唇音化を促したと考えていたことは確かです。

吉池：「口蓋性のゆるい中舌的な介音-ɨ-」が、唇の“つき出し円め化”を誘発したとする平山氏の理解は私にとっては不可解です。どのような拗介音であろうと、唇の端を左右に引く働きをするのであり、突き出し円めを誘発するとは思えません。いずれにしても、三根谷徹(1949)自体は、「口蓋性のゆるい中舌的な介音-ɨ-」として介音の“働き”を暗示していることができます。そうであるならば、軽唇音化の音声学的説明として趙元任(1941)に次

ぐ重要な文献という事になります。

中村：上は、三根谷氏の言説を付度した場合の平山氏の理解ですが、平山氏自身の考えはこれとは異なるようですね。

平山氏の説—C類声母の口蓋化について—

吉池：「私は、介音/-i-/が声母へもたらす何ほどかの口蓋化が軽唇音化に有利な音声学的条件として作用し、そのため軽唇音化は拗音の場合にのみ生ずることになったのだ、と考えたい。すなわち、口蓋化によって口端が左右に引かれる傾向をもつことは、奥舌主母音の影響で生ずる下唇と上歯との接触面を横に広げる効果を生み、摩擦音化を促進したであろう。また、口端が左右に引かれることによって、下唇は下歯の前面に押しつけられた状態となるので、奥舌主母音の影響による下唇と上歯との接触したいが、それだけ起り易くなる。このような理由によって、口蓋化は軽唇音化の有利な条件であったと考えるのである。」(13 頁)と述べます。これが平山氏の基本的な考えなのでしょう。

中村：三根谷徹(1949)は両唇音の後に「口蓋性のゆるい中舌的な介音-ɨ-」が後続することを軽唇音化の条件に挙げており、平山氏が両唇音の「口蓋化は軽唇音化の有利な条件であったと考える」とすることの間にはやや懸隔がありますね。

吉池：たしかに両者の拗介音をめぐる考えは相容れないように見えます。もっとも三根谷徹(1949)では、拗介音の働きが明瞭ではありません。それに対して平山氏は、拗介音(それに伴って引き起こされる唇音の口蓋化)の働きが明瞭です。

中村：平山氏は軽唇音化が生じた音節すなわちC類音節に口蓋化が起こっていたとするわけですが、その根拠はどこに求めるのでしょうか。

吉池：A・B・C類の帰字(被切字)に対して、正歯音三等・羊母・日母の反切下字がどのように使用されるかの傾向を、下のよう提示し【対談者によるまとめ】、「C類字を帰字とする反切では、これら諸声母の字が下字となることは珍しくないのであり、C類声母が或程度口蓋的な性質を有したことを示すのではないかと考えられる。」(16 頁)とします。

帰 字	正歯音三等・羊母・日母の下字使用の状況
A	ア. しばしば用いられる
B	イ. 稀に用いられる
C	ウ. 珍しくない

中村：あいまいな表現のア、イ、ウ自体を確認する必要がありますが、ひとまずこれを認め

たとして検討しましょう。

吉池：口蓋性の強い正歯音三等・羊母・日母を下字として使用する頻度が、イ（B類）＞ウ（C類）＞ア（A類）の順に増加する。これにより、B類＞C類＞A類の順で声母の口蓋化の程度が進むとされます。このC類の口蓋化についてはいかがでしょう。

中村：口蓋化が唇歯音化（軽唇音化）の条件になることについて、平山氏は音声学的な説明を試みっていますが、それに納得するのは難しいという印象です。三根谷(1949)のように、ゆるんだ介音と中舌・奥舌主母音に軽唇音化の要因を求める方がしっくりきます。平山氏の議論の中でも、とりわけ、反切下字の使用状況によって声母の口蓋化の度合いを論じる点については全く賛成できません。このことは以前の対談でも話題になったかと思いますが、反切上字によらずに、反切下字によって声母を論じるのは相当にアクロバットの的な方法で、反切の表音原理を無視したものであるように感じます。

吉池：反切下字の声母である正歯音三等[t_ɕ-]等・羊母[j-]・日母[ɲ-]の口蓋性が強いとして、それが帰字（被切字）の唇音声母の口蓋化[p_j]等を表わすと読み取れます。その読み取りに誤解が無いとしたら、たしかに受け入れがたいものです。

中村：韻母に違いを見るならば、A類とB類は対立があるので、A類音節の介音は-ɿ、B類音節の介音は-ĩとすることができます。A類音節の強介音-ɿに対して、強介音を持つ正歯音三等などの下字を多く当て、B類音節の弱介音-ĩに対しては、正歯音三等などの下字が少ないというのは自然な成り行きです。問題は、対立の無いC類音節です。C類音節の反切下字にも正歯音三等などが「珍しくない」程度に存在するとすると、これは何を意味するかということですね。

吉池：C類音節は、韻図の3等欄に置かれ、外国借音でも口蓋化の形跡は見られないので弱介音-ĩを持っていたと想定するのが有坂氏や河野氏の説ところです。それが正しいとしたら、C類音節に対する、正歯音三等などの反切下字への使用はB類と同様に「稀に用いられる」となるはずですが、そのようではなく、A類に近い用いられ方をするのは何故か。

中村：C類音節においては、強介音-ɿと弱介音-ĩの対立がなかったため、介音はどちらでもよかったということではないでしょうか。そこで、正歯音三等などの反切下字への使用がある程度認められたということでしょう。

吉池：そもそもの話ですが、口蓋性の弱いゆるんだ介音-ĩであれ、口蓋性の強い介音-ɿであれ、拗介音が後続すれば、その拗介音によって両唇音の口端が左右に引かれ音声的な口蓋

化は起こる。A類・B類・C類のいずれであっても唇音声母の音声的な口蓋化（口端が横に引かれる）は起こる。C類については、口蓋化（口端が横に引かれる）と同時に拗介音の調音により両唇の閉鎖が破れ、それを契機として中舌・奥舌主母音の影響で下顎が後ろに引かれ軽唇音化したと理解して良いのでしょうか。思うに、ア・イ・ウという不確かな根拠によって殊更にC類声母の口蓋化を持ち出さなくとも良い。

中村：平山氏は「C類声母は一般に——三根谷氏の解釈に従っていうと——口蓋化要素/j/を含んでいたと音韻論的に解釈されるのではないか、というのが私の見通しである。」（27頁）とします。「見通しである」との表現から推察するに、C類声母の口蓋化が、音韻的なものか音声的なものか、明瞭ではありませんが、その見通しには十分な説得力がないように思います。軽唇音化が生じた状況の説明に関しても、私は三根谷氏の説明（「口蓋性の弱いゆるんだ介音-ɰ-」の働きによって下顎がやや下がると理解した場合）の方が、無理がないように思います。

吉池：平山氏は、拗介音により口蓋化した唇音声母の唇の端が左右に引かれるとするわけですが、そのような説明の方が理解し易いと私は思っています。この点は中村さんと考えが異なるようです。

5. 脱軽唇音化について

吉池：平山氏は「現代諸方言への反映から見ると、東屋・尤の諸韻に於ける明母のみは、例外として軽唇音化を生じなかった。例えば現代北京語に於て軽唇音化を生じた微母はw-/ʷu-/-/として反映する（すなわち ɱ-はやがて鼻音性を失って w-に合流した）が、これら韻の明母字のみは m-を保存しており、軽唇音化がそこで生じなかったことを示している。このように一部のC類韻に於いて唇音声母の一部が軽唇音化を免れた現象を、本稿では仮に「脱軽唇音化」と呼ぶことにしよう。」（25頁）とし、軽唇音化しなかった明母について論じます。

中村：明母「脱軽唇音化」の議論については河野六郎(1954)¹²と平山氏の考えを確認しましょう。

河野氏の説

吉池：河野六郎(1954)は、軽唇音化が「唇音声母+介音ɰ+中舌母音」という条件のもとに起ったとします。これは、趙元任(1941)を受けた三根谷徹(1949)の主張とほぼ同様です。そして河野氏は「今假に東（屋）韻にも軽唇音化を生じた作用が働いたとしてみよう。そして

¹² 河野六郎(1954)「唐代長安音に於ける微母に就いて」『中国文化研究会会報』第4期第1誌。『河野六郎著作集2』平凡社、1979年、249-259頁所収による。

それが長安音という環境に於て行はれたとしよう。」(255 頁)という前提で議論を進めます。なぜ長安音に限るのかという点は疑問ですが、その論の要点は、平山氏のまとめによると、次のようです。

「すなわち、東屋・尤韻の明母は、一度は軽唇音化への途を歩んで（鼻音声母 denasalization が加わって） $\eta v-$ となった（そしてその過程で介音 i を失った）のであるが、明母 $mb-$ との聴覚上の contrast が主母音の円唇性のために明瞭でなく、そのため $\eta v-$ は再び $mb-$ に逆戻りした、というのが河野博士のお考えである。」(26 頁)

中村：具体的にはどういうことでしょうか。

吉池：たとえば、東韻と微韻を例として挙げるとつぎのとおりです。

軽唇音化しない明母 東韻 $mj\dot{u}\eta \rightarrow \eta u\eta \sim \eta v u\eta \Rightarrow m u\eta$

軽唇音化した明母 文韻 $mj\dot{e}\eta n \rightarrow \eta e\eta n \sim \eta v e\eta n$

この場合、軽唇音化した韻においては、「殊に ηv —allophone の場合寄生した v の存在が中舌的中心母音との contrast によつて際立つてみたと考へられよう。従つてこれらの韻に於ては明母への逆行は行はれず、却て v の發展によつて微母の確立が促がされたとも考へられる。東（屋）、尤の場合は之に反し軽唇音化の段階で介母音 i を喪失したが、中心母音の圓唇性の故に明母への逆行が行はれたのではないであらうか。」(255 頁) というのが河野氏の見立てです。

中村：異音（allophone）の存在によつて音変化を説明しようというのは、かなり斬新というか、奇抜な発想ですね。

吉池：特に長安音における非鼻音化と結びつける点にやや違和感を覚えます。軽唇音化は広い地域で生じた現象ですから、特に長安音の非鼻音化と関連付けるのは強引ですね。

6. 脱口蓋化について

吉池：平山氏は、切韻系韻書の反切に、軽唇音化する C 類音節のうち、東屋尤韻の明母音節の反切上字のみに拗介音がない一等韻字が使用されることを下記のように挙げ、「一般に C 類声母はある程度の口蓋化を帯びた音声であったが、東屋尤韻に於ける明母のみは、例外的に口蓋化のない——或はそれの甚だ微弱な——音声であった。I 類【一等：対談者】上字の使用はそれを反映している、と解釈する。」としました。

	東	董	送	屋
幫	風 方 _{3等隆}		諷 方 _{3等鳳}	福 方 _{3等六}
滂	豐 敷 _{3等隆}		贈 孚 _{3等鳳}	蝮 芳 _{3等伏}
並	馮 扶 _{3等隆}		鳳 馮 _{3等貢}	伏 房 _{3等六}

明	蒼	莫 ₁ 等中	夢	莫 ₁ 等諷	目	莫 ₁ 等六
	尤		有		宥	
幫	不	甫 ₃ 等鳩	缶	方 ₃ 等久	富	府 ₃ 等副
滂	{虎風}	匹 ₃ 等尤	{斗豆}	芳 ₃ 等酒	副	敷 ₃ 等救
並	浮	縛 ₃ 等謀	婦	房 ₃ 等久	復	扶 ₃ 等富
明	謀	莫 ₁ 等浮				

平山氏は、中古音に/pji- p'ji- bji- mji-/と/pi- p'i- bi- mi- /の音韻としての対立があったという前提から、上のような解釈に至ったわけです。

中村：つまり、まとめると次のようなことでしょうか。

- ①東屋尤韻の明母のみ、中古音において、後続する/-uŋ//-uk//-u/韻尾の影響により脱口蓋化し/mji-/→/mi-/となっていた。それは反切上字「莫」が示す。
- ②脱口蓋化した/mi-/であったため、軽唇音化しなかった（脱軽唇音化）。

吉池：そういうことです。平山氏は、唇音が口蓋化していることを軽唇音化の条件としているので、その条件が外れた（＝脱口蓋化）結果、軽唇音化を起こさなかった（＝脱軽唇音化）ということでしょう。平山氏としては論理が通っています。

中村：しかし、我々は音韻としてC類を口蓋化声母とすることは言うまでもなく、声母に口蓋化声母と非口蓋化声母の対立があるという平山氏の前提を認めていないので、当然、その議論を認めるわけにはいきません。

吉池：とはいえ、東屋尤韻の明母だけが1等字の「莫」を反切上字とすることについては、平山氏の説明は非常に巧妙です。中村さんに何か代案がありますか。

中村：事実をもっと単純なのではないかと私は思っています。つまり、「夢」「目」「謀」などの東屋尤韻の明母字は切韻編纂時すでに直音化していたのではないのでしょうか。反切上字に莫を用いているのはその反映だと思います。

吉池：しかし、反切下字は拗音字ですから、拗音と考えるべきなのではありませんか。たとえば次のようです。反切上字の直拗によって区別されており、理屈の上では、声母に口蓋化と非口蓋化の対立があると理解することは可能です。

	韻字	反切
軽唇音化しない東韻の明母	蒼	莫 ₁ 等中 ₃ 等

中村：菅（莫_{1等中}_{3等}）の反切下字は伝統的な表記をそのまま用いただけでしょう。当時の人にも「夢」「目」「謀」などが本来拗音であり、それが正しい音だという意識があったのだと思います。日本における歴史的仮名遣いのようなものです。伝統的というか、擬古的というか、そのような表記が音韻資料にはしばしば現れます。典型的なのは韻鏡です。韻鏡は切韻よりも数百年後の産物ですから、その時には軽唇音化した字はすべて直音になっていたはずですが、他の拗音と同じく3等欄に配されています。これも一種の擬古的な表記といえます。一方で、「切三」のように謀を莫侯反とする資料もあり、これは反切下字も直音ですから、擬古的でない当時の実際の発音がにじみ出たものと理解できます。

吉池：文（武_{3等分}_{3等}）と菅（莫_{1等中}_{3等}）などの反切上字における対立例は、口蓋化声母と非口蓋化声母の対立があったとする平山説にとって論拠となり得るものです。おそらく、声母に口蓋化の有無の対立を認める唯一の論拠でしょう。しかし、中村さんのように、東屋尤韻の明母字は切韻編纂時すでに直音化していた、拗音の反切下字は伝統的な表記をそのまま用いただけだと理解するならば、口蓋化声母と非口蓋化声母の対立を示す証拠（のようなもの）は無いということになります。

中村：口蓋化声母に関する平山氏の論は首尾一貫していません。重紐のA類とB類を口蓋化声母と非口蓋化声母の対立としておきながら、反切上字の使用状況については無視し、声母の口蓋化を検討する材料としていません。実際にはA類とB類の双方に対してC類字が多く用いられており、そこに声母の対立を認めることができないからです。ところが軽唇音化を起こしたC類字においては、上のように3等字の上字を用いるものを口蓋化声母とし、1等字の上字を用いるものを非口蓋化声母としています。自説に都合の良いものだけを論拠として取り上げているのです。反切を根拠にするのであれば、拗音の反切上字を用いるものをすべて口蓋化声母としなければ筋が通りません。

吉池：Karlgren(1915-1926)がかつて提案した説ですね。拗音の反切上字を用いるものは声母が口蓋化(yodized、j化)していたと。

中村：そうです。思うに、平山氏はカールグレン説の一部を巧妙に自説に利用したのではないのでしょうか。

吉池：どういうことですか。

中村：Karlgren(1915-1926)では3等韻と4等韻をともに拗音韻と考えました。現代諸方言

から見て自然な推論です。しかし、反切を見ると、3等韻では反切上字が拗音であるのに対して、4等韻では反切上字が直音になっています。そこで、カールグレンは4等韻は拗音であるが、声母は口蓋化していないと考えた。3等「蹇 *kjǎn*」に対する4等「堅 *kien*」のようにです。拗音音節でも声母が口蓋化していない場合には反切上字に直音を用いるという説明です。この発想を軽唇音化しなかった東屋尤韻の明母に当てはめたわけです。

吉池：今では4等韻は直音であったというのが定説ですね。つまり、反切上字が直音なのは声母が口蓋化していなかったからというより、そもそも音節が直音だったということです。中村さんは、東屋尤韻の明母においても同様に、反切上字に直音の莫が用いられているのは、夢・目・謀などが切韻編纂時にすでに直音であったことの反映と考えるわけですね。

中村：そういうことです。

吉池：今回の議論を少しまとめておきましょう。趙元任(1941)は 中舌・奥舌母音のもと軽唇音化が生じたとする仮説を提示し、三根谷徹(1949)は有坂・河野両氏の拗音説を受けて、口蓋性のゆるい中舌的な *-j-* が軽唇音化に加担したと趙氏の仮説を修正しました。平山久雄(1967)は、趙元任(1941)の仮説にとって不都合な韻母について、三根谷徹(1956)で展開された韻母の音韻論的解釈などを利用して解消したということですね。なお平山氏は、口蓋化声母と非口蓋化声母の対立の存在を前提として、東屋尤韻の明母の“脱軽唇音化”は、明母の“脱口蓋化”によるものとししました。しかし“脱口蓋化”を想定しなくとも説明は可能であることは先に述べました。

中村：平山氏は中古音の唇牙喉音に口蓋化声母と非口蓋化声母の対立があったとする考えを一貫して持っておられるようです。それは反切上字の検証によって証明すべきものですが、そのような議論が為されたとは思えません。平山久雄(1967)は、そのような声母の音韻的な口蓋化を持ち出して、軽唇音化の音声学的説明をするため、理解しにくいものとなったという印象を受けます。

吉池：それでは今回はここまでとします。次回は切韻(601年)とほぼ同時代の玉篇(543年)の状況について確認したいと思います。